

資料紹介 オオタカ

かとう
加藤ゆき (学芸員)



図1 自然形の本剥製 (KPM-NF 2000103).



図2 飛翔形の本剥製 (KPM-NF 2000627).

今回は酉年にちなみ、数ある日本産の鳥類の中で、何かと話題に上ることが多いオオタカ *Accipiter gentilis* を紹介します。当館には、オオタカの資料は6点あり、そのうち5点が本剥製、1点が骨格標本です。本剥製は用途に応じて姿勢を決め、業者に依頼して作ってもらいます。大抵の場合は木に止まっている自然な姿勢(図1)にしますが、飛んでいるときの翼や体の形を見せるために飛翔形(図2)にするとときもあります。これらは、講座や特別展で使用、展示をしてきました。骨格標本(図3)は講座や展示で使用することもあります、主に研究のために使います。

オオタカは、主に北海道と本州の平地から低山の林で繁殖し、冬は全国の低



図3 骨格標本:左から上腕骨2点、頭蓋骨、複合仙骨、胸骨、癒合鎖骨 (KPM-NF2000878).

山から平地の林にすみ、周囲の農耕地や干拓地、河原、湖岸などにも姿を現します。エサはハト類やカモ類、キジ類、ノウサギといった中・大型の鳥類や小型の哺乳類で、林の中やその周辺、干潟、河原などで捕食します。昔から鷹狩によく使われた種で、屏風や掛け軸などにも「鷹」として描かれてきたタカ類の代表格です。

神奈川県内では、ほぼ全域で年間を通して見ることができます。繁殖は春から夏にかけて行い、平地から丘陵地の雑木林やスギ林で子育てをします。秋から春にかけては、平地から低山の林や農耕地、河原などで見かけます。

調査に出かけたときには、必ずといってよほど見かける身近な鳥ですが、いままで、食事風景を見たことはありませんでした。しかし、昨年冬に、ついにオオタカが捕獲直後のヒドリガモを押さえ込んでいる場面に出くわしました(図4)。一番の興味は、どこからどのように食べ始めるのか? ということでした。

じっと観察していると、オオタカはヒドリガモの羽をくちばしでむしり取り、内臓から食べ始めました。猛然と食べ進むにつれて、喉もとの嚙囊*が膨らんでいくのがはっきりと分かりました(図5)。しばらくすると、満足したらしく飛び去り、後からトビとハシボソガラスが残りを食べにきていました(図6)。人間からすれば残酷なように思いますが、自然界ではごくあたりまえのことです。

近年、ゴルフ場や道路、大型施設の建設にともなう環境アセスメント調査などにより、オオタカが思った以上に人間の生活圏に隣接して生息していることが明らかになってきました。しかし、開発行為による営巣木の減少や生息環境の悪化、剥製目的の密猟などにより、生息数の減少が心配されるため、環境省編の「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—」では絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。タカ類の代表種ともいえるこの鳥が、いつまでも身近にいてほしいと思います。



図4 ヒドリガモを捕獲し、脚で押さえ込んでいるオオタカ。この時点でヒドリガモはまだ生きている(重永明生撮影)。



図5 羽をむしり内臓から食べ始めた。図4とくらべ、胸のあたりが膨らんでいる(重永明生撮影)。



図6 オオタカが飛び去った後には、トビ(右)とハシボソガラス(左)がきて残りを食べた。かれらは自然界の「お掃除屋さん」である(重永明生撮影)。

*嚙囊(そのう): 食道の一部が拡大してできたもので、硬い木の実や穀類をたくさん食べたり多量の生肉を食したりするような鳥類でよく発達している。食べものをやわらかくし、また一時的に貯蔵する役割を果たしている。

自然科学のとびら
第11巻1号(通巻40号)
2005年3月15日発行
発行 神奈川県立生命の星・地球博物館
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499
Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846
<http://www.city.odawara.kanagawa.jp/museum/g.html>
e-mail: plan@nh.kanagawa-museum.jp
発行人 青木淳一
編集 大島光春
印刷所 文化堂印刷株式会社

自然環境保護のため、再生紙を使用しています。